京都大学経済学部同窓会会報
京都大学経済学部同窓会　〒606-8501　京都市左京区吉田本町　京都大学経済学部内

ごあいさつ
―経済学部の現状と未来―

京都大学経済学部同窓会理事長
大学院経済学研究科長
経済学部長　田中秀夫

本年の四月から学部長・研究科長を務めております。同窓会の理事長も務めさせていただきますので、どうかよろしくお願いいたします。

先だって五月二〇日に、昭和三五年に卒業をされました皆さんの同窓会が時計台の国際交流ホールで開かれました。私もごあいさつをする機会をいただきました。昭和三五年はいわゆる六〇年安保の年で、五月一九日には多くの市民や学生が国会に押し寄せ、日米安保条約の強行採決に反対をしました。新入社員の皆さんのなかには会社をイスケープして密かに国会へ向かわれた方もあったかもしれませんね、と申し上げました。

その後、この世代の皆さんの多くはまさに高度成長の担い手として、経済界で活躍をされたわけで、今日の我が国の豊かな社会を構築するにあたって、大きな貢献をしていただいたと思います。その皆さんは、近経、マル経が鎬を削っていた中で、学ばれたのだと思います。知識人の社会では、ながく日米安保は悪者で、中国を賛美したり、全面講和を主張したりしました。しかし、アメリカと同盟関係を結び、アメリカの価値を受入れたことによって、沖縄を犠牲にした側面があることは否めませんが、我が国の自由と繁栄が可能になったことは今では否定できないでしょう。それは、当時は判然としないことでした。

しかし、これからはアメリカだけではなく、ますます中国との関係が重要になりますから、我が部局の東アジア経済研究センターや、東アジア関連の教育プログラムがいっそう重要になってくることは間違いありません。

わが経済学部は当時も今も複数の経済学の立場が共存し、切磋琢磨しているのですが、かつてのような近経、マル経という区分の垣根は無くしました。ベルリンの壁が崩壊し、冷戦が終焉してすでに二〇年以上が経過しました。グローバル化、情報社会化、環境問題の深刻化という全般的な趨勢の中で、社会のモデルは自由市場経済と社会民主主義の間で動いているのが現実で、そうしたグローバルな変化と国民経済の変容をいかに受け止め、経済学の教育の現場に反映させるかが重要な課題となっています。

経済分析はますます複雑な仕事になっており、経済学教育も複雑化してきました。国際化という強い流れがありますから、国際的な経済人を育成するという課題にも直面しています。また金融破綻などもあり、景気の低迷、乱脈財政による財政危機にも直面していますから、そうした問題にも智恵をしぼる一方で、市場経済に公正な秩序を与えることも重要であります。そうした智恵を出すのは経済社会の医者である経済学者の役目でもあり、容易ならざる課題ですが、不可能ではないはずです。

こういうことを申しますと、「理論を知らない田中の妄言である」と言われそうです。もとより未来の予測は実に難しい。経済学は所与の条件のもとで目的実現のための最適解を教えることのできる学問だと思いますが、所与の条件を的確につかむことが難しい。経済学の祖、アダム・スミスは自然的自由の体制がもっとも発展が期待できると述べていますが、しかし、大航海時代の幕開けによってインドが被った悲劇を考えると、将来、自由主義経済が幸福をもたらすかどうかわからないと主張しました。これは人間の強欲批判です。

さて経済学部の近況報告をしなければなりません。運営交付金の削減、科学研究費の採用の減少などによって、研究・教育に支障が出始めています。図書室は耐震化工事が済んで利用の便はよくなりましたが、しかし図書予算はぎりぎりのところまで切りつめざるをえなくなっております。職員は定員削減で少なくなり、外部資金で非常勤の職員を雇ってどうにか運営していますが、正職員は長時間労働を余儀なくされています。我が国の高等教育への公費支出は先進国中最低の水準であることは公然の事実です。

明るい材料もあります。経済学部は、今年も二四〇人を超える優秀な新入生を迎え入れ、経済学で先端的な研究を推進している若手教員三人を採用しました。定年で去られた森棟、八木という重鎮の後を埋めることができました。矢野剛（統計、中国経済等）、敦賀貴之（マクロ経済分析等）、佐々木啓明（社会経済学等）の三人です。またそれに先だって椙山泰生（国際経営等）、黒澤隆文（工業経済、ヨーロッパ経済等）、諸富徹（財政政策等）の三人が教授に昇格し、ますます教育研究に意気軒昂であります。

一方、学部生の学業への取組みも積極化しているように感じられます。選択制ですが、卒業論文を書く学生が増えてきていますし、また公認会計士試験に合格する学生も多くなっています。そこで、優秀卒論を表彰してはどうかと考えて、検討している次第です。河上肇賞、高田保馬賞という名称を用いてはどうかと思っています。

昨年から一回生向けの入門ゼミを一〇クラス設け、大学教育への第一ステップとしています。概ね成功している模様ですが、経済学部の課目はすべて選択制にしていますから、まれにいる大学に来ない学生に対して、学生の掌握をどうはかっていくかが課題になる時代となっています。一回生から同窓会に入会を認めることにしましたが、まだ周知が十分でなく入会者は多くありません。これも課題になっています。同窓会の皆さんのお知恵を拝借できれば幸いです。

他方、大学院入学者は博士でやや少なくなっており、対策を検討中です。過去二〇年間の経済の低迷が国策の大学院重点化に影響を与え、定員が増えたものの、若手研究者のパーマネント・ポストや任期付きポストが増えることなく今日に至っているわけで、二〇歳代末から三〇歳代の若手研究者にどのようなポストを創出できるか、まさに国家的な課題となっています。経済学部でもできることはないか、検討を始めています。

経済学部は同窓会や民間企業などからのご支援を戴いていますので、上海センター改め、東アジア経済研究センターの活動は充実が可能となっておりますし、寄付金や寄付講座などが研究の支えとなっていることは言うまでもありません。七〇周年で寄せていただいた募金が今なお有効なファンドとして教育研究を支えてくれています。二年前に九〇周年だったのですが、経済状況も悪く、記念事業を断念しました。それだけに八年後の一〇〇周年に期することは大きなものがございます。皆様のご支援、ご鞭撻をよろしくお願いします。

卒業生名簿の発行について

この度、京都大学経済学部・経済学研究科修士課程卒業生名簿を平成22年８月に発行いたしました。

この名簿は、同窓会年会費を納入して頂いた方に配布しております。

◇

同窓会総会のご案内

平成22年度経済学部同窓会総会を下記の日時に開催いたしますので、何かとご多用のことと思いますが、会員諸氏お誘いあわせのうえご出席賜りますようご案内申し上げます。詳細につきましては、同封のご案内状を御参照下さい。

記

日　時　　平成22年11月13日（土）14時30分～18時
場　所　　京都大学百周年時計台記念館

◇

会費納入のお願い

平成22年度（22年４月～23年３月）の同窓会年会費5,000円を同封の払込用紙で、納入下さいますようお願い申し上げます。

京都大学経済学部同窓会事務局
住所：〒606－8501　　京都市左京区吉田本町
ＴＥＬ　075－753－3419　　ＦＡＸ　075－753－3490
京都大学経済学部同窓会ＨＰ
http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~dosokai/D-index.html
なお、ご住所変更の折は、お知らせ下さいますようお願いいたします。

近況報告

副学長職のこの頃

京都大学理事・副学長
西村周三
（平成二十一退職）

私こと、平成二十一年三月に経済学部教授職を定年退職いたしました。しかしその後も平成二十二年九月末までの任期で京都大学の理事・副学長職としてとどまっております。昨年三月の時点では、そのあとは、理事・副学長職に専念できるので、少しは暇になると期待していたのですが、まったく予想に反して超多忙を極めております。いまは九月末の任期満了を指折り数えて待っているところです。

もちろん使命感を持つことのできる職ですので、後悔はありませんが、一例をとりますと、ほんのわずかの不心得者の学生の不祥事（違法薬物所持など）が相次ぎ、なんとかそういったことが起きないように工夫をすることなどで、心を痛めております。

もちろんそういった、ある種ネガティブな仕事ばかりではありません。大学全体の教養教育のあり方を改革するミッションを総長から与えられ、少しずつではありますが実現の方向に向かっています。また大学教育の国際化も重要な仕事の一つです。十分な英語能力を持つ学生を教育して欲しいという要望に応えて、手を打っています。

ここ十年ほど、世界的には、海外に留学する大学生が二倍以上になっているにもかかわらず、日本から海外に留学する学生の絶対数が減少しているのは、日本にとってゆゆしきことだと考えています。京都大学の学生についても例外ではありません。そのことを、一年ほど前から、いろんな場を通じて訴えてきましたが、最近に至りマスコミや社会全体が、ようやく認知するところとなってきました。一年前にそのことを訴えたときには、多くの識者が「自分の大学の教育の質が低いから、留学させようというのか？」といった疑問もいただきましたが、経済界でご活躍の方々には、その必要性をいまさら説明するまでもないと思います。

教育担当の副学長になって、いくつかの先入観を打破することに腐心することが多くなりました。たとえば先に述べたように、一部の不心得者を出さないための工夫として「初年次教育」というものを導入しようとしました。法令遵守という一見当たり前のことに注意を喚起する講義や入学時の不安な学生心理につけ込む「カルト集団」への対応策、学習意欲の向上のためのプログラムなどの導入を計画したところ、大別して二つの否定的な反応がありました。京大生に対しては、そんな懇切な講義は必要ないというものと、もう一つの反応は、「そんなことをやっても効果がない」というものでした。物事を斜に構えて見るという悪癖を持った新聞記者には、効果を疑問視する記事を書かれ、私自身くじけもしました。

しかしその後、私は、ますますそういった努力が必要であると痛感し、賛同者も増えています。教育というのは、その結果が相当あとになってからでないとわからないので、難しい仕事であると、つねづね思っていますが、学生に対する愛情を基礎に、残された任期中、努力をしたいと思っています。

京都大学には教授だけでも千名を超す方がいらっしゃいます。准教授、助教を含めると三千名を超す方がおられ、それぞれ研究だけでなく、教育に一家言をお持ちです。こういう人たちを説得し、合意をとるという作業は、気の遠くなることです。副学長と言っても、決して単純に、上に立って命令する立場にはありません。そんなことをしても効果的ではないからです。そういうことを実感し、日々、自分の微力さを痛感しながら仕事をしている毎日です。

東京回帰

京都大学名誉教授
山本裕美
（平成二十一退職）

京大経済学部に赴任して十二年間の単身赴任生活をして、定年後も関西で骨を埋める覚悟でしたが、家族の強力な反対に合い、あえなく東京回帰となりました。自宅から京王線で中央大学の多摩キャンパスに通勤しています。電車は新宿方向とは逆方向なので楽です。

中央大学経済学部の研究室は十二階建てビルの研究棟の十階にあり、かつ多摩キャンパスは山の上にあるので空気は美味いし、見晴らしがよい。教員の休憩室からは富士山が望めます。富士山を見ると東京に戻って来たことを実感します。また廊下の大きな窓からは新宿の高層ビル群も見えます。快晴の時に新宿の高層ビル群の少し上方に高い山が見えたので、後で地図で調べると筑波山のようでした。

研究室はウナギの寝床で狭いのが、悩みです。京大の研究室の三分の二位なので京大から引っ越しする際にかなりの本や資料を処分せざるを得ませんでした。それでも部屋に両壁面の本棚でおさまらず、本棚六本を部屋に立てています。講義上の悩みと言えば、私立大学はコマ数が多いのが悩みです。今年は前期五コマ、後期七コマです。

学部や大学院で環境経済学の講義を担当していますが、七十歳定年までに環境経済学＋開発経済学＝サステイナビリティの経済学を追究し、経済の陰陽両局面の総合分析をしようと思っています。学部や大学院のゼミでも東アジアの経済発展と環境問題をテーマに設定しています。サステイナビリティの経済学は理論的には最適成長理論、最適制御理論、動的計画法、確率微分方程式、ゲーム理論等が必要でこれらの勉強をボケ防止にやっています。研究室が隣であった地球物理学専攻のT名誉教授と親しくなり、彼が私的に開催する自然科学のセミナーにも参加しています。T先生の河川のネットワーク理論は最近国際的に注目されており、先生も張り切って研究に今も励んでおられます。私は、また統計力学を応用したマクロ経済学の論文を読んでみたくなり、量子力学や統計力学の勉強をしたいと思っています。量子力学や統計力学は二、三月に放送大学の集中講義を偶々見て非常に興味が湧いています。また以上の分野の関連の新著や旧著をインターネットで外国の書店から購入して悦に入っています。全く便利な世界になったものです。

量子力学と言えば、学部生の時ハイゼンベルグ教授の講演が湯川秀樹博士の司会であり、超満員で立錐の余地ない法経一番教室で立って聞いた思い出があります。一九九九年十月にベルリン自由大学の創立五十周年に京大国際交流委員会の派遣で参加した後、フンボルト大学（旧ベルリン大学）も訪問したところ、正門の大ホールに四十名程の歴代のノーベル賞受賞者の顔写真が飾ってあり、その最後の写真がハイゼンベルグ教授で、私が学生時代に博士の講演を聞いたと話すと案内役の若い女性が驚いていたことを思い出します。つまり、東ドイツ時代のこの名門大学は一人のノーベル賞学者も生みだすことが出来なかったのです。

最近は神田の古本屋街でも経済学関係の掘り出しものはなく、理系の本を中心に探索しています。私は元々農学部出身なので生物学、化学、物理学、数学を学んだので生物学にも関心があり、最近はゲーム理論の中でも進化ゲーム理論の本を読んでいます。

日々の生活は、家族と一緒に休みには家族で食事に外出したり、時たま社会人の娘二人に映画に誘われたりして岡潔先生ならぬ「日々是好日」（映画ファンならご存知でしょう）ともいうべき平穏な日々を過ごしているというのが近況です。

名誉会長　中村寛之助さん逝去

本同窓会名誉会長の中村寛之助さんが三月三十一日午後一時五十三分、肺炎のため逝去されました。八十一歳でした。

中村名誉会長は、昭和二十八年のご卒業で、平成十年十月から平成十五年一月まで東京支部長を、平成十四年十一月から平成十八年十月までの二期四年間、会長を務められました。

お別れの会が五月十二日、午前十一時半から東京日比谷の帝国ホテルで行われましたが、東京支部長の西澤さん他、数名の同窓生が出席しました。

卒業生だより

卒業後の会社人生を振り返って

河村　真（昭五十九卒）

昭和五十九年（一九八四年）に経済学部を卒業し、早や二十六年が経ちました。母校に戻って研究に取り組んでいる学友からの要請を受け、今年五十歳になるこれまでの会社人生を振り返るいい機会と思い、恥ずかしながら寄稿することにしました。

大学時代を振り返れば、これを勉強したい、習得したいという具体的な目標もなく入ったため、御多分に洩れず全く勉強せず、クラブ活動、サークル活動にバイトと、体よく言えば社会勉強に明け暮れた四年間でした。軟式野球WOODSTOCKで一緒の時間を多く過ごした仲間とは今でも付き合いがあり、友人と結成したアイドル研究会では十一月祭で企画したコンサートで新聞沙汰を起こした懐かしい思い出もあります。ゼミは組織論の渡瀬ゼミに入りましたが、これまた恥ずかしながら、大学時代よりも大学卒業後の渡瀬先生との思い出の方が印象が強い有様です。

卒業後、大阪に本社を持つ製薬会社に就職しました。総務部株式担当を一年、国内営業を四年半経験した後、国際法務室に異動し、二年前に広報部に異動するまでの約十八年間、法務・契約業務を担当しました。その間、ニューヨークにある法律事務所への派遣、シカゴ郊外にある米国子会社への出向を経験し、生き馬の目を抜くような同業との競争、特にすさまじい訴訟社会を肌を持って経験しました。帰国後は、厳しいビジネス環境の中での会社の生き残りを賭けての事業整理、企業再編を担当し、その結果として、五年前に東京に本社を持つ製薬会社と合併したことに伴い、東京に転勤となり、現在に至っています。

二年前から広報部を預かることとなり、顧客・社会・マスコミ・株主・投資家・従業員など全てのステークホルダーからの信認を得るべく、先頭に立って広報活動に努めています。日々格闘している中で強く思うのは、広報という業務を遂行する上で、幅広い会社情報と一般知識、高度な表現スキルと対話力が求められる中、これまでの人生で得た知識・経験が全て生かされているということです。全く勉強せずに社会勉強に明け暮れた大学の四年間の経験もしかりです。そういう意味で、定年を六十歳とすると会社人生も残り十年となりましたが、今後も自分自身を進化させることが出来る、そうしたいと思っています。

最後に、京大経済学部の益々の発展と四年間を一緒に過ごした旧友の活躍を祈念し、卒業生だよりとさせていただきます。

組織の中で働く

田原靖太郎（平二〇卒）

私は、現在英系の銀行に勤務して三年目になります。在学中は遊喜ゼミに所属し開発経済学を学びつつ、長期休暇にはゼミ旅行やバックパックなどでアジアの途上国を訪ねました。日系企業が集積する工業地帯・大規模な農園開発等、各国で先進国が途上国経済に与える影響の大きさを目の当たりにしました。そういった体験からか、金融という立場から途上国への投資を促し、途上国の経済発展に貢献したいと思い、アジアに広いネットワークを持つ現在の銀行に就職することを決めました。

入社一年目、電力開発・化学プラント建設・交通インフラ整備等、海外プロジェクトへの資金融資を担うプロジェクトファイナンス部で研修を行いました。途上国政府が関わるプロジェクト業務を銀行という立場から見ることができました。この研修中に強く実感したのが、「社会貢献を意識しながら働くことが非常に重要だな」ということでした。まず自分のしていることが多くの人に影響を与えていると思えることで仕事へのモチベーションが上がります。また、誰かの役に立つからこそ、そこから収益が生まれます。誰の役にも立たないようなプロジェクトからは最終的に収益もあがりません。

入社二年目に業務統括部という個人金融の事務部門に異動し業務が一変しました。納税手続き・商品別の収益管理や業務アウトソースによるコスト削減活動等、会社内部の仕事を担当しました。一日中、パソコンに数字を入力したり、日付印を押したりし続ける日もよくありました。銀行の内側を知ることができ非常にいい経験をしたと思う一方で、「今自分のしている仕事は誰かのためになっているだろうか。」と思い、仕事に魅力を感じられなくなることもありました。社会のために働きたいと思う気持ちと自分が直面している実際の仕事のギャップにとまどっていたのだと思います。ですが、今では組織全体として社会に貢献しているのなら、その組織の最下層にいる一個人として会社に貢献するのも悪くないなと思っています。忘れがちですが、自分の仕事の先の先の先にある「社会貢献」を常に頭の片隅におくことが大切なのだと考えるようにしています。

再度の異動により今は法人営業部門で海外拠点を持つ日本企業の財務分析・企業融資を担当しています。自分の仕事が少しでも日本企業のお役に立てばと思いながら働いております。

大学生活と、その繋がりにある日々

渡邊秀也（平二〇卒）

私が入学したのは平成十五年。ちょうどカリフォルニア大学の中村教授が世界で初めて青色の発光ダイオードを発明したころでした。また時代もIT全盛だったこともあり、私は工学部電気電子工学科に入学しました。一般教養では難解な統計学や確率論に苦しめられたことを覚えています。（今となっては、ここで学んだことが役に立っていますが。）

基礎的な学問の習得から始まった大学生活でしたが、ひょんなことから経済学部に転学部をしました。その年に他学部から経済学部に転学部したのは私を含めて三人程度でしたから、珍しい行動だったと思います。覚えているのは、工学部を辞めるときには学科長との面接があったものの、経済学部に入るときは何の面接もなく通過できたことです。京都大学の自由な校風を感じることができました。

経済学部に入った後は、金融工学を専門としていらっしゃった岩城秀樹先生のもとで御世話になりました。工学部時代は三百年近い前に研究されていたことを一から学ぶ日々でいつになったら現代の電気工学を学べるのかと思ったものですが、金融工学は新しい学問ということもあり、数学的な面白さもあったことから専攻に決めました。

ゼミでは主にポートフォリオ理論や、オプション価格の決定要因について勉強することができました。

近況報告として、現在アイシン精機コーポレートファイナンスグループに勤務しております。仕事としてはストックオプションの価格の算定や為替の担当者としてディスカウントの算定をしながらディーラーと交渉の日々を送っています。

オプションの価格について役員から説明を求められることもあるのですが、ここでゼミで勉強したことが役立ち、担当者として充実した仕事をすることができています。為替の先物価格の算出についても工学部から培った数学的な素地が役に立ち、仕事に活かすことができたと考えています。

思えば私の人生は大学時代から大きく変わってきていますが、数学を使って分析し、それを活かすということにおいては変わっておらず、学部を変えたことで幅広い教養を身につけることができたと思っています。今でも研究者になるのも面白かったなあと思いますが、これからの人生は大学のゼミで学んだ専攻を元にチャレンジしていきたいと思っています。

新社会人

大西健太（平二十二卒）

皆様こんにちは。私は今年の三月に京都大学経済学部を卒業し、四月より外資系証券の投資銀行部門に勤務しております。今回卒業生だよりに寄稿する機会を頂き、この機会に学生時代に思い描いていた仕事に対するイメージと、実際に社会人生活を送ってみて思うところを報告させて頂きます。

大学時代は西牟田ゼミにてお世話になり、国際的に活躍する欧米の金融機関の歴史および最近の動向を学びました。金融機関のビジネスに対して比較的受身なイメージを抱いていた私は、欧米金融機関の積極的な活動ぶりに衝撃を覚え、その時初めて将来の仕事として金融機関を意識した事を覚えております。その後のゼミでの学習を通じて、各企業、ならびに各国経済に甚大な影響を与える金融機関のビジネスに興味を深め、現在の勤務先の会社を含めて、所謂外資系金融機関を目指して就職活動

を進める事となりました。しかし、当時世の中はサブプライムローンを起因とする経済危機の真っ只中であり、そもそも今受けている会社が存続するのか？という状況で不安に駆られながらも必死に就職活動を行っていた事を今となっては懐かしく思い出します。

厳しい状況ながらも、幸運と就職活動中に出会った人々との良縁に恵まれ、現在の勤務先に進むチャンスを頂きました。その後今年の四月から働き始め、早いもので三ヶ月がたとうとしています。この三ヶ月、日々の業務に追われ、気がついたら一日が終わっているという毎日が続いておりますが、忙しい中でも常に新しい発見があり、諸先輩方から様々な知識を吸収できる環境に大変満足しております。

欧州の経済問題など現在世界経済を取り巻く状況はまだまだ先が見えない状況であり、自分の将来のキャリアについても不透明感が拭えない中でも、この道を選択して良かったと常々思っております。

今後は、自分の興味の対象を詳細に見極め、その興味に沿った専門性を身につけることで、将来のキャリアにおいて常に楽しみながら仕事を続けていければと考えております。とはいえ、この先の長い長い社会人生活のまだスタート地点に過ぎず、今後の長い人生において辛い事もあるかと思いますが、いつになっても今現在抱いている初心を忘れぬよう日々精進していくことを誓い、今回の報告の締めとさせて頂きます。

私の研究

京都大学大学院経済学研究科　教授
今久保幸生

私の主たる研究対象はドイツ経済・経営史および同通商政策史である。修士論文では、第一次世界大戦前におけるドイツ電機工業の労使関係を取り上げた。一九七〇年代の当時、外国で一次史料を収集するのは経済的条件が許さず、私はその代替策として、ウェーバーの調査方法論に基づくドイツ社会政策学会の一連の「封鎖的大工業労働者の淘汰と適応」調査と電気技術職員に関する学位論文、およびユルゲン・コッカのジーメンスの企業管理に関する学位論文の批判的整理を踏まえた研究を行った。成果の一部である職員の勤続年数に従う昇給と労働者の仕事賃銀との相違の事実発見は、小池和男らの研究の先駆けとなったが、この相違を小池のように独占段階における職務の変化から説明するのではなく、企業側の労務管理方針によるとした点で、私の修論は研究史上の独自性をもつ。

一九八〇年の佐賀大学赴任（経営労務論担当）以降一九九〇年の京大転任（工業経済論担当）後数年は、一九世紀末ドイツ電機工業の生産・労働過程分析を行い、これを学位論文に仕上げた（『一九世紀末ドイツの工場』京都大学経済学叢書一、有斐閣一九九五年）。この研究は、修士論文の課題を深めて、①当時の日本の労働問題研究の焦点であった職場レベルの労働力取引の視点から、②事業部工場の（原価計算を含む）経営分析と賃銀・労働時間管理を軸とした人事・労務管理分析とを、③電機諸企業史料館で収集した膨大な非公刊一次史料を渉猟して遂行したもので、方法と分析内容からみて今日なお内外の学界に類を見ぬ独自性をもった研究であり続けていると認識している。

その後、研究対象を両大戦間期に据え、当時のドイツ経済を主導したドイツ電機工業における流れ作業の導入と展開に関する研究（『経済論叢』第一六七巻第三号、二〇〇一年）、および二大ドイツ電機コンツェルンの欧州を軸とした多国籍事業展開に関する、米国国立文書館史料に基づく研究（一九九九年京大開催の社会経済史学会全国大会共通論題報告。「ジーメンスとAEG」［渡辺尚編『ヨーロッパの発見』有斐閣　二〇〇〇年］として発表）を行った後、経済政策論担当となって以降は、一九一八～一九二五年におけるドイツの通商政策を、ドイツ外務省政策史料室やドイツ連邦文書館の政策一次史料に基づき研究している。

今日のEUに至る第二次世界大戦後の欧州統合やこれを主導してきた独仏連携の特質を捉える際、第二次大戦前との関連の重要性が一般的に指摘されることがあっても、ベルサイユ条約によりドイツの通商自主権が剥奪された一九一八年～一九二五年の状況の、そうした文脈での独自な重要性については、研究史上殆ど着目されてこなかった当時の状況は、せいぜい一九二五年以降に本格展開される通商政策の前のいわば挿話として触れられるに留まり、この時期の通商政策自体を実証的に掘り下げた研究も見あたらない。しかし、当時のフランスのドイツ占領政策と対独通商包囲策とこれに抗するドイツの通商政策との関係は、一九二五年後の欧州の通商関係を規定しただけでなく、第二次世界大戦後のECSCを軸とした欧州統合の出発状況と対比した場合に独特の相似性と対照性をもっており、その意味で双方は重要な連続面と断絶面をもつ。この点に鑑みれば、戦後の欧州統合と独仏枢軸の形成と展開、およびドイツ通商政策の展開を把握するためにも、一九二五年までのワイマル前期におけるドイツ通商政策の研究は欠かせないのである。

この問題意識により二〇〇七年の経済空間史研究会にて「ドイツ・ワイマル体制前期の通商政策」と題する報告（http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~kurosawa/kuukanshi.html）を行い、二〇〇八年の社会経済史学会近畿部会夏季シンポジウムでは、「第一次大戦後のヨーロッパ経済空間再編をめぐる独仏間関係の展開」と題する報告で、フランスの対独包囲網にも拘わらずドイツが国際分業上の実績により中東欧地域を把握してゆく過程を解明した。現在は、以上をさらに掘り下げて、一九二五年までの連合国による占領地域等とドイツとの通商関係を、「連合国間ラインラント委員会」とドイツ側の「被占領地域高等弁務官府」との関係に焦点を当てて研究している。今後は、一九二五年までの少なくとも鉄鋼・石炭、農業、為替、通商条約に関する政策を内外諸利害の対立と絡めて研究してゆく予定である。

九〇年代半ば以降は、現代世界経済の構造変化と日本経済との関連にも着目してきた。日本電機・電子産業の広義の東アジア展開（渡辺尚他編『型の試練』一九九八年、Klenner/Watanabe (eds.), Globalization and Regional Dynamics, Springer二〇〇二）や、「東アジア経済統合における日韓FTAの意義と課題」（慶北大学校編『東北アジア経済協力の展望と課題』二〇〇四年）、「東アジア統合と日本の戦略」（今久保他編『孤立と統合』京都大学学術出版会、二〇〇六年）、「グローバル化と東アジア統合の日本労働市場への影響」（Klenner/Watanabe (Hrsg.), Japan und Deutschland: Neupositionierung ehemaliger regionaler Führungsmächte, Peter Lang Verlag, 二〇〇八）に関する諸論考はその成果である。現在は、世界同時不況後の日本経済とその経済政策を、一九世紀以来後進国工業化による農工国際分業上の試練に対応してきたドイツのそれと対比しつつ研究している。二〇一〇年に京大医学部芝蘭会等で行った講演（「現代日本の対外経済政策について」）では、この対比を踏まえて、日本の輸出・投資先としてのアジアやインフラ投資を強調する通説の一面性を批判し、過度の米国依存を改め、先進国や後進国を含めてGDPの規模や成長率に応じた諸国・地域や品目でのバランスの取れた貿易・投資を展開することの重要性を指摘した。

出版案内

『制度と調整の経済学』

ナカニシヤ出版　二〇〇九年

京都大学大学院経済学研究科　教授
宇仁宏幸

この十年間、日本経済の改革をめぐる大部分の議論は「市場対国家」という思考枠組みに支配されていた。この思考枠組みの下で、具体的には「小さな政府か大きな政府か」や「構造改革か景気対策か」など様々な政策論争が行われた。しかし、経済理論分野では、市場対国家という単純な二元論は陳腐化しつつある。一九八〇年代以降、主流派、非主流派問わず、制度に関する関心が著しく高まり、市場や国家による経済調整だけでなく、制度による多様な調整が重要であることがわかったからである。二〇〇九年のノーベル経済学賞を受賞したオリバー・ウィリアムソン氏は、「新制度派経済学」のリーダーである。制度を重視する経済理論としては、この他に、青木昌彦氏が提唱する「比較制度分析」、レギュラシオン理論および「資本主義の多様性アプローチ」などがある。本書の前半では、制度経済学の立場から、日本の経済調整のしくみや問題点を、雇用、賃金、金融、為替レートなどに焦点を当てて分析している。後半では、制度による調整を重視して、経済成長や景気循環のしくみについて理論的、実証的に論じている。

本書では、制度による調整を、次の二種の区別により、四つに分類している。第一の区別は、社会単位の調整か、企業単位の

調整かという区別である。第二の区別は、協議・妥協にもとづく調整か、権力・命令にもとづく調整かという区別である。協議・妥協にもとづく社会単位の調整は「コーディネーション」と呼び、協議・妥協にもとづく企業単位の調整は「企業単位コーディネーション」と呼ぶ。権力・命令にもとづく社会単位の調整を「規制」と呼び、権力・命令にもとづく企業単位の調整を「ヒエラルキー」と呼ぶ。

どの国の経済においても、これらの調整は併存しているが、ひとつひとつの比重が国により異なっている。日本においては、企業単位のコーディネーションが経済調整において大きな役割を果たしており、このことが日本経済の強みにも弱みにもつながっている。強みをもたらす好例としては、日本の技能形成制度が挙げられる。アメリカでは、大学院レベルの高等教育によって、技術者や管理者の高技能を育成している。ドイツなどでは公的な職業訓練機関で一般労働者の高技能を育成している。日本では、長期雇用を前提に、企業内で長期にわたり集団的に行われる職業訓練が、正社員の高技能を保証している。このような日本型の技能形成制度が自動車などの高い国際競争力に貢献している。

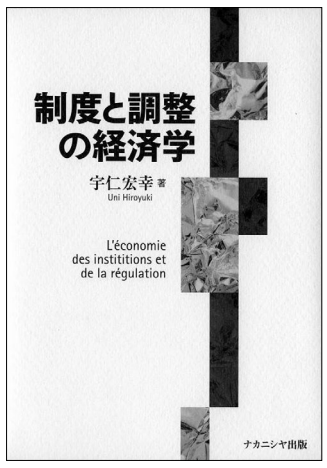
しかし、雇用や技能形成を主として企業単位で保証するという日本型制度は、バブル崩壊後の経済再生にとっては、弱みとなった。過剰資本や過剰雇用を減らすプロセスでは企業や産業を越えた資本と労働の移動や、損失と痛みの社会全体での分配が必要である。このような課題に関しては、社会全体での合意形成が必要であり、企業単位のコーディネーションは有効性が低い。社会単位のコーディネーションが不足している日本はこれらの課題を先送りしてきた。これが日本の一九九〇年代の長期停滞を導いた。

同様のことは、社会保障制度改革の先送りについてもいえる。一九八〇年頃から日本では、世界でもまれにみる速さの高齢化が進行し、年金給付や高齢者医療費給付が急増している。このような給付の大きな構造変化にもかかわらず、年金保険料の労使折半の原則および給付額の三分の一の国庫負担原則については、つい最近まで約三十年間も変えられなかった。この制度改革の先送りは、とくに加入者の平均年齢の高い国民年金制度の赤字を増加させ、保険料未納者や未加入者が増加した。

また、主に賃金コストを削減するために、一九九〇年代末以降、製造業において、派遣労働者と請負労働者が増加した。しかし間接雇用型の非正規労働は、直接の雇用主による技術管理や教育訓練が不十分となる点など独自の問題点をかかえている。このような問題に対処するには法規制の枠組みが必要である。しかし、ドイツやフランスと比べると日本の派遣・請負労働に関わる法規制は極めて不十分であった。

また雇用の非正規化と並行して、正規社員向けに導入された成果主義的賃金制度は同一学歴内格差や同一職業内格差の拡大をもたらした。成果主義的賃金制度は、企業内コーディネーションを重視する働き方とも、中途転職が難しい長期雇用制度とも整合性を欠いており、見直しに追い込まれた企業も少なくない。

一朝一夕にできることではないが、社会単位のコーディネーションを強める制度改革が日本では必要である。



退任教員の紹介

平成二十二年三月三十一日　定年退職

経済学研究科・経済学部教授

森　棟　公　夫

一九七五年　九月　スタンフォード大学経済学研究科博士課程
一九八五年　九月　京都大学経済学博士
一九八六年　四月　京都大学経済研究所教授
二〇〇一年　十月　京都大学経済学研究科教授
二〇〇六年　四月　京都大学経済学研究科長・経済学部長
（二〇〇九年　三月まで）

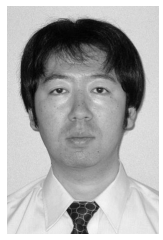
平成二十二年三月三十一日　定年退職

経済学研究科・経済学部教授

八　木　紀　一　郎

一九七八年　三月　名古屋大学経済学研究科博士課程
一九八九年　五月　京都大学博士（経済学）
一九八八年　八月　京都大学経済学部教授
一九九七年　四月　京都大学経済学研究科教授
二〇〇九年　四月　京都大学経済学研究科長・経済学部長
（二〇一〇年　三月まで）

新任教員の紹介



経済学研究科・経済学部准教授

佐々木啓明

就任年月日
平成二十二年四月一日

担当講義科目
学　部／社会経済学2
大学院／現代資本主義分析B、社会経済学・理論A、技術と進化の経済学

出生地・生年月日
青森県八戸市
一九七二年十月六日

感想・抱負等
みなさま初めまして。佐々木啓明と申します。本年四月から経済学研究科の一員となりました。東北大学に入学し、東北大学で博士号を取得し、東北大学で助手と博士研究員を経験し、縁あって本学でお世話になることになりました。東北生まれの東北育ちで、青森、岩手、宮城と少しずつ南下してきたのですが、このたび一気に南下することとなりました。私の専門はポスト・ケインズ派経済学で、とりわけ、ポスト・ケインズ派の経済理論に基づいて、景気循環や経済成長に関する理論分析を行っています。学部と大学院でも、ポスト・ケインズ派経済学に関することを教えています。この科目を体系的に講義しているのは，国内では京都大学だけだと自負しております。現在は非主流派経済学の一つかもしれませんが、研究と教育を通じて、ポスト・ケインズ派経済学を少しでも世に広めていくことに貢献できればと考えております。よろしくお願いいたします。

経済学研究科・経済学部准教授

敦賀貴之

就任年月日
平成二十二年四月一日

担当講義科目
学　部／動学マクロ経済分析
大学院／貨幣・価格とマクロ経済、マクロ経済政策分析

出生地・生年月日
愛知県
一九七二年十二月二十六日

感想・抱負等
大阪の関西大学で二年教鞭をとり、本年四月より経済学研究科に着任いたしました。学部や大学院では、金融面から見たマクロ経済学などの講義を担当いたします。

研究・教育では、モノやサービスの価格の変動がどのように経済全体に影響を及ぼしているのかを数量・理論的に検証しています。モノやサービスの価格は一つ一つでは経済全体に大きな影響を及ぼしませんが、多くの価格が同時に変動するときには、景気や金融政策といった重要な経済問題と関わってきます。だからこそ、一つ一つの価格の理解が重要だと考えて研究しています。

二年前に関西に来るまで、関西とは無縁の生活をしていました。そのせいか、いまだに京都の文化に戸惑うことも多いです。これまで京都大学とは無縁の人生を送ってきました。微力ではございますが、教育・研究活動を通じて、新しい視点から京都大学に貢献できるよう努力いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

経済学研究科・経済学部准教授
矢野　剛

就任年月日
平成二十二年四月一日

担当講義科目
学　部／基礎統計学、アジア移行経済論
大学院／社会統計学Ⅰ・Ⅱ、アジア経済数量分析Ⅰ・Ⅱ、東アジア経済論基礎、移行経済論

出生地・生年月日
京都府
一九七〇年七月九日

感想・抱負等
平成二十二年四月より京都大学経済学研究科に着任いたしました。それ以前は、十一年間四国の徳島大学に勤務し教鞭をとっておりました。本学の学部・大学院では、社会統計学・途上国経済論に関わる教育を担当させていただきます。私の研究における専門分野は広く言えば途上国経済の計量分析なのですが、計量分析にいくまでに分析対象現地での聞き取り調査を綿密におこなうこと、使用する統計データの制度的基礎（誰がどのようなルールの下で如何に収集するか）を重視していることも私の研究の特徴です。ここ十年ほどは中国経済に傾注しています。特に、企業間信用（手形や掛け取引）を中心とする企業金融、市場における信頼関係の形成過程とその要因、企業家の生成に関心を持っております。微力ではありますが、本学の教育・研究活動に可能な限りの貢献をして参ります。ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

各支部からの便り

東京支部

昨年の同窓会報に、東京支部の再活性化の必要性とその対策について記載したが、今年度はそれを実現に移す最初の年となる。

その有力な手段として、昨年九月にオープンした「京大東京オフィス」（品川）の積極的活用を進めている。学士会館でやっていた「経済懇話会」を、昨年十月の第二十六回（森棟先生）からここに移して、第二十七回（一月・藤井先生）、第二十八回（六月・江上先生）と順調に推移している。「ここは母校のもの」ということで、認識度も向上しており、平均の出席者は三〇％増の一三〇名となっている。

机・いすの準備と片づけ、飲食ケータリングの手配その他、「大学の教室を利用する」事の手間はかかるが、出席者の喜ばれるお顔を思い、オフィスの人達の支援・協力を得ながら、東京支部事務局一同が汗を流している次第である。

松本総長の講演

「平成の会」、「支部理事会」、その他、二次会では外に出る場合でも、最初の着地はこことして、集合する事にしている（松本総長はじめ大学の英断で我々にも拠点が出来たわけで少しでも応えたい思いである。）

次の課題は「支部総会への若い出席者の増加」である。従来の「平日夕刻・東京会館」を今回の第二〇回総会から次のように模様替えをした。

（1）日時：三月十日（土）午後二時から五時、と仕事現役世代が出やすいように「土曜・午後」に。（2）会場を学士会館にして、会費を従来の九千円から五千円に大幅引き下げ。これだけの寄与ではないが、出席者は二〇名増（一八〇名に）、平成年度卒も増加となった。三連休の初日（若い人の欠席理由に多かった）だったことを考慮すれば、この方向でよしとの手応えが得られた。今回初めての出席者から事務局を手伝いましょう、という積極的な申し出もあり、役員の若返りをも進められそうである。

今回の講演を松本紘総長にお願いし、「日本の未来と科学…太陽系文明へ」という題で、日本の科学技術振興の必要性、宇宙での太陽光発電の大いなる可能性について、力強く且つユーモアに富んだお話しを頂いた。一同深く感銘した。

ピアノの山浦さん、作家の山田さん、多田さんなど女性陣も活躍されて、明るく、楽しく、そして意義のある総会となった。午後五時終了なので、ゆっくりと二次会に出かけたグループも多く見受けられた。

（合田隆年（昭三十五卒））

田中学部長から先生方を紹介

話のはずむ総会風景

京大グッズは完売！

大阪支部

平成二十二年一月二十九日（金）に、理事・幹事会が大阪市内の大阪ガスビルにおいて、十八名の出席のもとに開催された。河合支部長（昭三十九卒）からの挨拶の後、役員交代、平成二十年度会計報告等について審議がなされた。あわせて、大森理事（昭三十三卒）から京都大学上海センターの活動について紹介があった。なお、本会において、河合支部長が退任し、新たに出田善蔵氏（昭四十五卒）が支部長に選任された。

その後、ガスビルホールおよびガスビル食堂において、七十七名の出席のもとに、第十九回大阪支部総会・講演会・懇親会が開催された。総会では、河合前支部長、出田新支部長の挨拶、京都大学大学院経済学研究科の小島専孝教授のご挨拶、ご来賓の先生方のご紹介の後、同窓会本部事務局の常務理事を務められている櫻田先生から同窓会の活動状況について、ご報告いただいた。また、林理事（昭五十二卒）から平城遷都千三百年記念事業について紹介があった。講演会では、京都大学大学院経済学研究科の文世一教授から「交通政策の経済分析―高速道路料金、関西空港問題など―」という時宜を得たテーマでご講演をいただいた。

出田支部長の挨拶

引き続き、懇親会では、出田支部長の挨拶、小島専孝教授のご挨拶、現京都大学経済学部同窓会の辻井会長（昭三十一卒）による乾杯のご発声で幕を明け、卒業年次を越えて、大いに交流を深め合った。最後に、小塚副支部長（昭四十七卒）の挨拶で、盛会のうちに終了した。

大阪支部では、今後とも会員の拡大等を通じて支部活性化を図っていく。

辻井同窓会会長の乾杯

懇親会

【大阪支部　連絡先】
・大阪ガス株式会社　秘書部気付
・住所：〒五四一―〇〇四六
大阪市中央区平野町四丁目一番二号
・電話番号：
〇六―六二〇五―四五〇一
・FAX番号：
〇六―六二〇五―七二七五
・メールアドレス：
zenzo-ideta@osakagas.co.jp
（出田善蔵（昭四十五卒））

神戸支部（神戸同好クラブ）

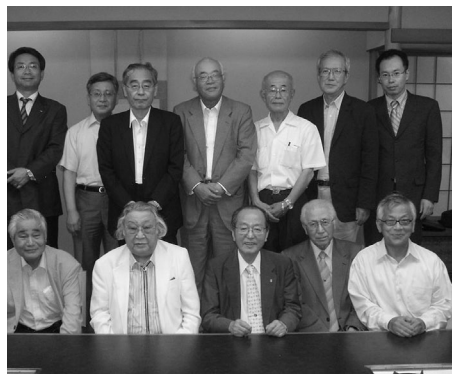
今年は六月二十八日に十二名が参加して同窓会が神戸の老舗料亭「山田屋」で開催された。

懇親会に先立ち、板東慧支部長より挨拶があり、その後、支部長を京都大学名誉教授の本山美彦大阪産業大学教授に引き継いでいただくことが決まった。

京都大学経済学部から来ていただいた草野真樹准教授には、経済学部の活動を、特に学生の学習意欲の向上を図るための大学の試みについてご説明頂いた。異なった価値観を持つ若い世代とのコミュニケーションの問題は先進国において共通の課題であり、卒業後のことも考えると、大学のみならず、行政、企業が協力し長期的に対応すべきと感じた。

現在、約五十名の卒業生が神戸支部会員として同窓会に登録されている。しかしながら、今年の参加者のうち、六十歳未満が二人という状況であり、多くの参加者は現役を退いておられる。同窓会の高齢化は東京支部はじめ他の支部でも大きな課題。漠然と参加者を如何に増やすかという発想から、一歩踏み込んで、同窓会のミッション（役割）は何かを考えるべきと思う。

私見だが、現役世代が魅力を感じるための方策のひとつは情報の発信・交換の場としての同窓会の役割だと思う。現役世代は電子メール、イントラネット、インターネット、ソーシャルネットワークの中で仕事を展開している。その意味から会員同士のフェース・ツー・フェースの年一度の集まりとしての同窓会だけでなく、ネットを利用した日々の情報交換、情報発信の場としての同窓会の役割は大きな可能性を秘めている。そして、会員間の今までの地域単位の交流から、全国規模さらにはグローバルな瞬時の交流、さらには、経済学部教授たちと産業界で活躍する現役世代との活発な議論・交流の実現など、可能性は拡がってゆく。


神戸同好クラブ懇親会

【神戸支部　連絡先】
・（有）パフォーマンス・マネジメント研究所気付
・電話番号／FAX
〇七八―五八一―二三一八
・メールアドレス
nojirijin@iijimio-mail.jp
（野尻賢司（昭四十四卒））

香川支部

去る平成二十一年十一月二日、高松市内のホテルクレメント高松において、第九回目となる香川支部総会を開催した。今回総会は主に近況報告や懇親を目的に約一年半ぶりに開催したもので、支部会員四十五名のうち二十二名が出席した。

まず、支部長の千葉昭氏（昭和四十四年卒）による挨拶の後、出席者の中で最年長となる倉本勇氏（昭和二十三年卒）の乾杯の音頭により開宴し、出席者はアルコールを交えながら歓談。それぞれの近況報告はもとより、学生時代の懐かしい思い出話に花を咲かせながら、同窓生として世代を超えて親睦を深めた。また、このような総会という形だけでなく、今後は懇親のためのゴルフコンペを計画するなど、様々な形で当香川支部の結束を深めていくことも確認された。

同窓会本部からは、大変お忙しい中にあって、黒澤隆文准教授がお越しくださり、大学ならびに経済学部の近況についてご紹介いただいた。

途中、記念撮影をはさむなど総会は和やかな雰囲気で進行。予定していた時間は瞬く間に経過し、名残を惜しみながらの散会となった。

当支部では新規入会が無い状況がここ数年続いている。香川支部事務局としては、就職・転職等で香川県に来られる卒業生はもちろんのこと、現役学生も含め、香川に所縁のある皆様からのご連絡を心よりお待ちしている。

香川支部 総会

【香川支部　連絡先】
四国電力株式会社　経営企画部　吉田元信
（平成七年卒）
〒七六〇―八五七三
高松市丸の内二番五号
TEL：
〇八七―八二一―五〇六一
Eメール：
yoshida14452@yonden.co.jp
（吉田元信（平七卒））

愛媛支部

昨年度の当支部活動状況は、つぎのとおりです。

①　総会・懇親会

平成二一年七月一五日（土）午後五時より、伊予銀行松山保養所にて総会。出席は二〇名。本部より、小島専孝教授がご参加、大学・同窓会の状況など報告をいただく。つづいて桝田三郎支部長の高齢による退任の申し出を受け、新支部長渡部晃夫、副支部長村田武、支部幹事梶原正秀の人事を決定。六時頃より八時過ぎまで、懇親会、大いに歓談。二次会も盛会でした。なお昨年までは、年二回総会・懇親会を開いていましたが、次に述べる全学の愛媛同窓会の総会・懇親会の年一回開催が定着してきたので、学部同窓会を年一回とすることになりました。

②　京都大学愛媛同窓会（全学）総会・懇親会

平成一八年九月設立された全学同窓会は、昨年第四回の総会開催にあたり、経済学部と法学部が、当番幹事を引き受けることとなり、二学部で協力して準備をすすめ、平成二一年一二月一八日、松山全日空ホテルで、約八〇名（内経済学部八名）の出席をえて、盛大に執り行われた。大学本部からは松本紘総長と西村周三副学長・理事（元経済学部長）にお越しいただき、西村副学長には特にお願いして「日本の社会保障の将来」の演題で特別講演をいただきました。

当支部は、会員数五〇名ほどの小組織ですが、五〇年以上にわたって、元気に活動しています。しかし会員の高齢化は、如何ともし難く、また新規の入会者が少ないことが、大きな悩みです。現役学生もふくめ、特に若い新規入会者を歓迎します。

【愛媛支部　連絡先】
松山市北梅本町八〇六―一
（〒七九一―〇二四二）
渡部　晃夫
TEL：
〇八九―九七五―三六七九
（渡部晃夫（昭三十一卒））

九州北部支部

一．会員数
二〇〇名程度
地元企業・地方自治体等への就職者を中心に、東京・大阪に本社を置く企業の九州北部地区勤務者等により構成。

二．役員氏名
支部長：鎌田　迪貞（昭和三十三年卒　九州電力（株）相談役）
理　事：黒瀬　和男（昭和三十年卒）
理　事：橋本　剛（昭和四十三年卒）
理　事：藤永　憲一（昭和四十八年卒　九州電力（株）取締役常務執行役員）
理　事：薬真寺偉臣（昭和五十一年卒　九州電力（株）経営管理部長）
理　事：花田　恭一（昭和五十三年卒　㈱福岡スポーツセンター　代表取締役社長）

三．総会・懇親会
・例年五月に年一回の総会・懇親会を開催しており、今年度は五月三十一日（月）にホテルニューオータニ博多において、オブザーバー参加の法学部卒一名を含め、二〇名が出席した。
・総会では、鎌田支部長からの挨拶の後、ゲスト参加いただいた岩城秀樹教授から、大学ならびに経済学部・経営管理大学院の近況などをご紹介いただいた。
・その後、恒例となっている参加者全員による自己紹介を行った。一年ぶりの再会となったメンバーは、学生時代の思

九州北部支部 総会

い出や京都への思いのほか、最近取り組んでいる仕事のことなど近況を報告しあい、懇親を深めた。

・参加者数が近年やや減少傾向にあるため、本総会以外の懇親会の開催や、総会開催日程・場所の工夫等を通じ、同窓生（特に若年層）の掘り起こしおよび総会・懇親会への新規参加者増に一層努めたい。

四．役員会

・適宜、役員会・懇親会を開催して、大学や同窓会本部の状況などについて情報交換を行っている。

五．その他

・今後も、同窓会本部と連携を図り、同窓会の発展に努めたい。

【九州北部支部　連絡先】

・九州電力株式会社　経営管理部
・〒八一〇―八七二〇
福岡市中央区渡辺通二丁目一番八二号
・Tel
〇九二―七六一―三〇三一
・Fax
〇九二―七一六―一〇九四
・メールアドレス
Keisuke_Shimozuru@kyuden.co.jp
（下水流圭祐（平成十三卒））

九州南部支部

第十四回九州南部支部同窓会総会は、平成二十二年七月十七日（土）に宮崎県延岡市内のホテルメリージュ延岡で開催された。当日の総会出席者は十五名であった。

一．総会

総会では、瀬地山敏支部長による挨拶の後、支部運営に関する事項の確認並びに報告が行なわれた。引き続き、同窓会事務局本部からお迎えした経済学研究科・経済学部准教授の遊喜一洋氏から、学部や研究科の近況などについてご紹介いただいた。

▽役員（理事・幹事）について

平成二十二年度の役員は次のとおり。

支部長：瀬地山　敏氏（昭和三十五年卒　鹿児島国際大学学長）

理　事：熊本県理事　林田素行氏（昭和四十四年卒、林田公認会計士事務所所長）、宮崎県理事　岡野　徹氏（昭和三十八年卒、旭有機材工業（株）相談役）、鹿児島県理事　丸元貞夫氏（昭和三十八年卒、阪東機工（株）代表取締役会長）

会計監事：中村隆之氏（平成八年卒、鹿児島国際大学経済学部准教授）

二．講話

延岡市長の首藤正治氏（京都大学工学部昭和五十四年卒）より、「延岡市における『新しい公共』」と題して、約一時間ご講話をいただいた。首藤氏は延岡市の概要について説明された上で、行政の根本目的は住民福祉（幸福）の増進であり、その実現のためには、経済性や競争原理だけでなく、協力原理に基づく「新しい公共」あるいは社会関係資本（social capital）の醸成が重要であること、そしてそれこそが人間関係の豊かさにつながり、ひいては地域力の向上にもつながり得ることを、延岡市における経験を踏まえながら、明快かつ説得的に論じられた。

九州南部支部 総会

三．懇親会

懇親会は、海江田順三郎氏（昭和二十八年卒 高島屋開発（株）相談役）の乾杯により開宴。出席者それぞれの近況報告、学生時代の思い出話、今後の展望などについて、酒盃を交わしながら歓談が行われた。また、比較的若い世代の出席も多かったことから、世代を超えた活発な交流ができ、終始和やかな雰囲気のもと、有意義な意見交換ができた。

四．その他

今回の九州南部支部総会の開催に先立ち、「延岡の産業史をたどる見学会」が企画され、十一名が参加した。延岡市は旭化成（株）発祥の地であり、現在では九州有数の産業都市である。また旭化成（株）の創業者であり延岡に化学工業発展の基礎を築いた野口遵（一八七三～一九四四）は、南九州三県にも大変ゆかりの深い人物である。今回の見学会を通じて、そのさまざまな業績や足跡について知ることができ、また地域と企業の関係などについても学ぶことができ大変有意義な機会となった。なお、今回の見学会は、岡野徹氏の多大なる御厚意ならびに御尽力により実現したものであり氏には厚く御礼申し上げます。

【九州南部支部　連絡先】

・富澤拓志
・〒八九一―〇一九七
鹿児島市坂之上八-三十四-一
鹿児島国際大学経済学部（富澤研究室）
・TEL　〇九九―二六三―〇七一七
・FAX　〇九九―二六一―三六〇六
・メールアドレス
tomizawa@eco.iuk.ac.jp
（富澤拓志（平二卒））

京都大学経済学部 卒業五十周年記念総会

（昭和三十五年卒）

合田隆年（昭三十五卒）

二〇一〇年五月二十日(木)午後一時、京大百周年記念時計台・国際交流ホールにおいて、「春たけなわの宇治分校で二〇〇名が初めて顔を合わせ、法・経の中庭で卒業アルバム用の写真を撮ってから、もう五十年が経ちました。…」という、司会・進行役の私（E1・合田）の挨拶で、我々昭三十五年（一九六〇年）卒の「五十周年記念総会」が始まりました。出席者は四クラス合計で八十名、当初定員の四割ですから、まずまずでした。

★・・・・★

最初に舞台裏の話しをいたしましょう。昭三十二年卒から始まり昭三十三年卒、三十四年卒と夫々立派な「五十周年記念総会」をやられたので、三十五年卒もこれを続けて欲しいという要請を、同窓会担当の櫻田先生から受けたのは昨年の春でした。昭三十三、三十四の両年度は学年全体で会を組織され、東西でかなりの頻度で例会を開催、しかも積立金までお持ちという基盤があります。

我が三十五年はクラス単位の会しかなく、五十年間全体では一度も集まった事はありません。そこで若干の情報交換を基に「開催の予告、当日の二次会、宿泊の手配、翌日の懇親行事、最終案内・出席者名簿作成」など、手間のかかる連絡業務をすべてクラス単位でやって頂く事にしました。クラス間で開催密度の違いもあり、これは大変だったと思いますが、クラス幹事の皆さんが完璧にやって下さったので、当日は実にスムーズに運ぶことが出来ました。

E·1　岡崎の竹茂楼にて二次会（翌日は有志で京都GC・上賀茂へ）

E·2　時計台会場にて。合唱団も参加。（京大会館で二次会）

私は経済学部同窓会の手伝いをしていますので、櫻田先生、および同窓会事務局員のご支援を頂きながら、とにかく総会・懇親会の準備と予算管理に徹しました。学年全体の積立金は無いので、極力当日清算とし、酒代等の見通しがついたところで、会費一万円のところを、各人一千円分クラス幹事に終了前に返す事が出来ました。

★・・・・★

総会に戻ります。最初に「E1・重定秀幸さん、E2・鷹野原進さん、E3・塚口博文さん、E4・枷場久平さん」からクラスでの活動状況等についてご報告を頂きました。次に、ゲストとして最後までご出席頂いた田中秀夫学部長の、温かいご挨拶と乾杯の音頭により、懇親に移りました。

会場設営は生協、飲食は時計台の「ラ・トゥール」に依頼しました。年齢を考えて、着席ビュッフェにしてクラス単位でテーブルに着く事にしました。料理も「高齢者小食的美食」をお願いしましたが、好評でした。

出し物としては、京大合唱団（男性）にお願いし、鈴木康平リーダー以下九名が正装で出てくれました。折角の機会なので、早めに来てもらって一緒に飲食し、各テーブルに入ってもらって、学生と我々の交流をトライしてみました。就職の相談などもあって、それなりに有意義だったと思います。（学生も感謝していました。）

合唱団のハイレベルな三曲のあと、全員で「学歌」と「琵琶湖周航歌」を斉唱しました。櫻田先生の経済学部百周年（二〇一八年）というお話もあり、次にまた集まる事が出来ればいいな、という思いが参加者全員の胸中をよぎったかもしれません。幹事をはじめ皆さんのご協力に心からお礼を申し上げます。

E·4　京都新阪急ホテルで二次会（翌日有志で奈良・平城宮へ）

E·3　時計台会場にて。（二次会はキエフというロシア料理へ）